シベリア自然探訪紀行

〈続編〉

豊かな流れ、原生の森

井上信夫　新潟市

タイガを流れるホル川の景観

中州に設営したキャンプの焚き火を囲みながら語る彼らの口調は確信に満ちていた。

「この森を守っているのは我々ハンターだ。」…シベリア各地で大規模な森林伐採が進む中、この流域に見事な原生の森が残されている訳を彼らはそう説明した。そして、「少しでも気を許せばこれからどうなるか分からない。」ともつけ加えた。

見上げる空は満天の星、川のせせらぎに混じってコノハズクの「ブッキョッキョー」という声が時折タイガの中から聞こえてくる。

ふと河原の石の上に目をやると、カワゲラの幼虫が次々と川辺から上陸しては、流木やテントにはい上ってくる。朝日が昇るころには無事羽化して、たくさんの成虫が川面を飛び回り、その短い生を謳歌することだろう。

それにしても、この清く澄んだ滔々たる流れと、両岸に広がる鬱蒼たる森林はどうだろう。ここには人の手が加わらぬ原生の自然、いまだ岩や巨木に神々が宿る太古の自然が残されているのである。

中州のキャンプ地の食事風景

ウスリーの森の植物相

今年六月に訪れたのは、ハバロフスクから直線で一五〇㎞ほど南東に位置するウスリー地方の山中である。ここには信濃川規模のホル川と、多数の支川が流れている。日本海北部に面した標高二千mクラスの山々が連なるシホテアリン山脈の一隅に源を発するホル川は、密林を縫うように流れ下ってウスリー川に合流し、ハバロフスク近くで東シベリアの大河アムール川に合流している。

一昨年訪れたマヤ川流域は北緯五八度、新潟から二千㎞も北方に位置している。以前本誌の「シベリア自然探訪紀行」で紹介したように、天を突くような細く尖ったシルエットを描く針葉樹がほとんどで、日頃見慣れている森とはおよそ違った厳しい雰囲気をかもし出している。一方ホル川は北緯四八度前後、新潟から千㎞ほどしか北でない。同じシベリアとは言っても森林の様相は全く異なる。広葉樹が大部分を占め、丸い樹冠がはるか稜線まで続く。森の表情はずっと柔らかく、日本から訪れた私たちにとっては、より親しみやすいものがある。

シベリアと一口に言っても、東西南北に実に広大な広がりを持った地域である。元来はヨーロッパロシアから見た東の〝未開地〟を指すもので、ウラル山脈から大陸東端のベーリング海・オホーツク海に至る地域である。したがって、気候や植物相が大きく違っても当然ではある。

ウスリー地方の低地に分布する植物相は、冷温帯落葉広葉樹林に属する。我が国で言えば、本州中部から東北地方にかけて分布するブナ・ミズナラ帯に相当する植物相で、新潟県付近では標高二百～三百mから千二百mぐらいまで分布しているものである。

現地のハンターが河畔にある巨木の森に案内してくれた。木々の胸高直径は一、五m、樹高は優に二十五mを超している。樹種はウルム（ハルニレ）・シナノキの仲間・ドロノキなどで、キハダも直径数十㎝に育っている。林床には、山菜として馴染み深いクサソテツ（コゴミ・コゴメとも呼ぶ）が一面に繁茂し、高さ一m以上にも達している。土壌は実に肥沃で、腐植土が厚く堆積している。一瞬これが本当に極寒のシベリアの森かと目を疑った。これまで見てきた針葉樹の森とはあまりにも違ったからである。

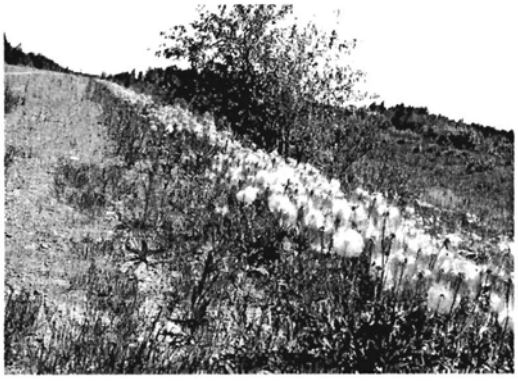
ところで、ここウスリーの森には、我が国に分布する生き物と同種、あるいはごく近縁な種類が多数生息しているのである。全く初対面の動植物に出会うのも悪くはないが、知っている動植物との出会いは、なにか昔なじみに出会ったようなうれしさを感じさせてくれるものだ。

ハルニレやドロノキ・シナノキなどの広葉樹やチョウセンゴヨウは、かつて慣れ親しんだ秋山郷の山中で目にしたものと同じもので

巨木の森と林床のクサソテツ

左／地元の案内人の一人、バウエル

下／岸辺まで生育する森林



ハバロフスク近郊の道ばたで見かけたオキナグサの大群落

シベリア自然探訪紀行

右／チョウセンゴミシの花
左／ミヤマハンショウズル

ある。イタヤカエデの仲間も見え、ウワミズザクラによく似たエゾノウワミズザクラやコシアブラに似て棘だらけのエゾウコギは北海道にも自生している。

ロシア語でレモーニックと呼ぶチョウセンゴミシは、林床に生えるツル植物で、秋に赤い実を房状につける。我が国では中部以北の山地に自生するごく珍しい植物だが、ウスリーではそこかしこに見られ、砂糖漬けにして食用にされている。チョウセンゴミシ（朝鮮五味子）は江戸時代に朝鮮半島から持ってこられたことでこの名があるが、後に我が国にも自生することが分かったという。赤く熟した実を日干しにして煎じたり、ホワイトリカーに漬けて服用すると、滋養強壮・疲労回復の効があるという。ウスリーの住民は、実だけでなく葉を紅茶に散らして独特の樹脂臭を楽しみ、健康増進にも役立てている。

草花も日本と共通のものが多く、林内にはニリンソウやベニバナヤマシャクヤク・スズラン・ミヤマハンショウズルなどが美しい花を咲かせている。

列島の地史を物語る生き物たち

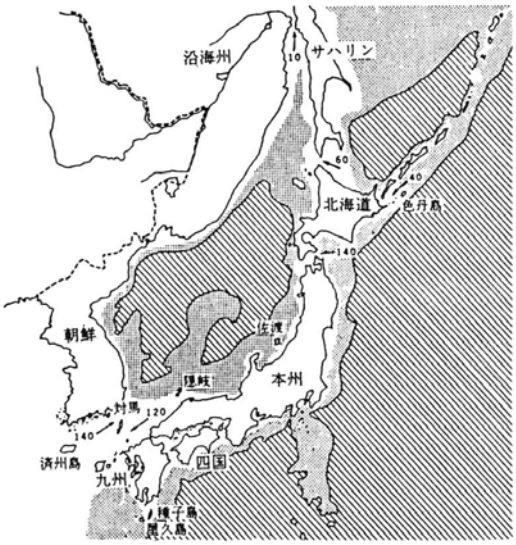
シベリアと日本の生き物が共通し、あるいは類似している原因を探るには、日本列島の歴史を過去にさかのぼる必要がある。

今から約二万年前のウルム氷期の最寒冷期には、海面は現在より百二十～百四十ｍも低かったという。一方、津軽海峡の深度は約百四十ｍ、宗谷海峡は六十ｍ、サハリンとシベリアの間の間宮海峡はわずか十ｍしかない。このため、各海峡は干上がり、日本列島は大陸と地続きになったのである。このような現象は、氷河時代に入った約六十万年前から幾度となく起こったことが知られている。

この陸橋（りっきょう）を通って、動植物が次々に大陸からやってきた。北海道にはマンモスが渡来し、今でもヒグマやクロテン・シマリス・ナキウサギ・エゾライチョウなど、サハリンやシベリアと共通の種類が残っている。本州にも、かつてヒグマやトラ・オオヤマネコ・ヘラジカなどが生息していたことが出土する化石から明らかになっている。また、植物も遅々たるスピードながら、種子を分散しながら日本列島に入り込んできたのである。

大型動物の多くは、その後の気候変動や動物を追ってきた古代人の狩猟圧によって姿を消していったが、陸橋を伝って北から南から渡来した生き物たちが混じり合い、実に多様な特有の生物相を形成しているのである。

したがって、シベリアの動植物は我々人間を含めた日本列島の生きものたちのルーツの一つでもあるわけである。共通種や類似種が多いことは、取りも直さずかつて陸続きであったことを物語る証拠でもある。

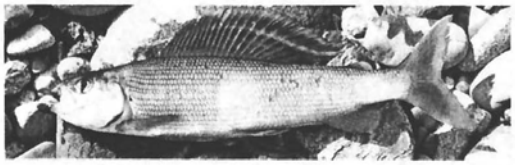


日本列島周辺の海底図（徳田御稔著、生物地理学。築地書館）

原生の森の豊かな動物相

ところで、ロシアでは鬱蒼（うっそう）とした森林をタイガと呼んでいる。地理学上、タイガは亜寒帯に分布する針葉樹林を示すが、現地では広葉樹林を含めた大森林一般を指す呼び名で、〝密林〟と訳されることが多い。ウスリーには、広葉樹を主体とした多種多様な植物が繁

左／蛇とたわむれるカルヤギン氏
下／秋にはサケの産卵場となる小支川



上／60cmほどになるレノック（サケ科）

下／美しい色彩のハリウス……極めて美味な魚だ

茂する密林が広がっているのである。

この原生の森は、清らかな流れと多くの動物たちを育んできた。ここには、我が国では遠い過去に失われてしまった動物たちの王国が現存しているのである。

ウスリーの森に住む動物の中で最も注目されるのは、何と言っても現生のネコ科最大の動物であるシベリアトラであろう。トラの中では最大の亜種で、オスの方が大きくなる。頭の先から尾の付け根まで三m以上、体重三八四kgもの記録があるという。かつては、シホテアリンに四百頭ほど生息していたが、今では百八十頭ほどに減少し、ホル川流域には六頭が生息しているという。

トラと並ぶ大型獣としては、ヒグマが挙げられる。北海道のエゾヒグマより大きめで、最大のオスは体長二、五m、体重四百kg近くになるという。ヒグマは雑食性であるが、産卵に溯上したサケを好んで捕食し、イノシシやシカ類なども襲う。

ツキノワグマは、我が国に分布するものと同種であるが一回り大形で、体重百五十kgほどになるという。ウスリー地方ではヒグマより生息数が多いが、元来南方系のクマであるため、この北方にはほとんど生息していない。

この他にも大型獣が多数生息しているが、イノシシやヘラジカ・アカシカ・ウスリージカ・ノロなどのシカ類は、トラやヒグマの重要な食糧ともなっている。

中型〜小型肉食獣も多い。ネコ科のオオヤマネコ、イタチ科のクロテン（セーブル）・イタチ・オコジョ・イイズナ・クズリ・カワウソ・アナグマ、イヌ科のキツネ・タヌキ・オオカミなどである。

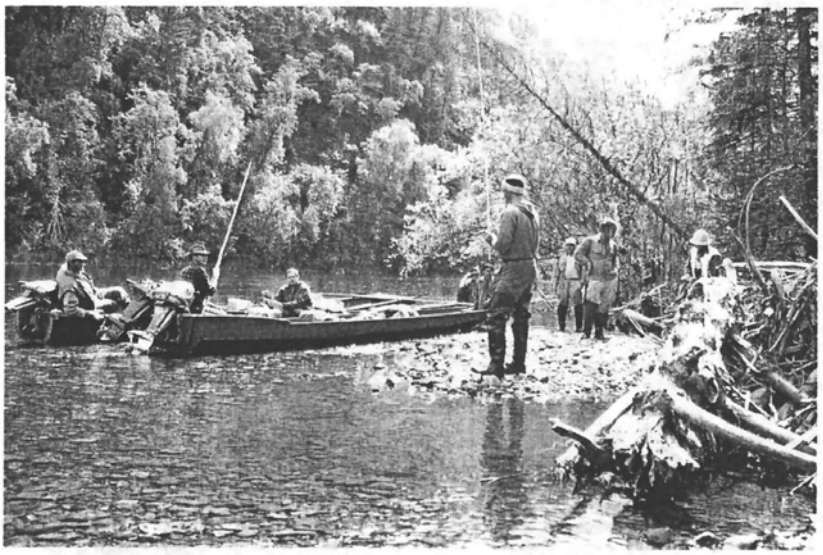
右／レノックの胃内物を調べる

下／川岸に残されたカワウソの足跡

もちろんこれらの生存を支える中型〜小型の草食獣も数多い。ウサギ科のユキウサギやマンシュウノウサギ、ナキウサギ、リス科のキタリスやシマリス・タイリクモモンガ、それに各種のネズミ類である。

シベリアの人と自然を訪ねて

これまで私たちは、仲間うちでシベリア各地を訪ねてきたが、多くの方々からあの感動を共有してもらうため、一般募集のネイチャリングツアーを企画することにした。手始めにこの九月中旬、六名のメンバーで再びホル川流域を探訪する。



ホル川の支川・チュケン川の景観

巨木の森のクマゲラやシマフクロウ、上空を旋回するイヌワシを探し、川べりに残されたシベリアトラやカワウソの足跡、立木に刻まれたヒグマの爪痕を、できれば動き回る彼らの姿を追い、原生の森と清らかな流れにどっぷりと浸ってきたいものだ。

過去の日本でもかくあったであろう手つかずの大自然は、改変され過ぎた自然に慣れっこになっている私たちに、本物の自然を見る感覚を呼び覚ましてくれる。私たちの旅は、シベリアの大自然に触れる旅であり、同時に自然と共生するシベリア先住民の知恵や狩人たちの生き方を学ぶ旅でもある。